『文心雕龍』と『詩品』
――曹丕に対する評価をめぐって――

今場正美

斉梁時代の代表的な文学理論書に『文心雕龍』と『詩品』がある。両著は、その批評の方法、原理、目的などにおいて対照的な関係にある。

劉勰の『文心雕龍』は文学の源流を経書に求め、ジャンルごとに批評する方法をとり、従来の文学理論書の精神を受け継いで、これらを総合し体系化することによって、文学の伝統を維持する目的のもとに著わされた。一方、鍾嶸の『詩品』は経書などにもとづかないストレートな表現を求め、五言詩のみを基準として文学を論じ、作家の優劣を定めようとする。

時代を後漢末の建安時代に限定して両著の性質の相違を見れば、建安文学全般に対する評価において、劉勰が概括的な批評をするだけであるのに、鍾嶸は文質の調和した文学の最盛期と考えていることがあげられる。

建安文壇は「建安の七子」とこれを主導する曹氏兄弟によって構成される。ここでは、兄の曹丕に対して、『文心雕龍』と『詩品』とがどのような評価を与えているのか比較してみたい。

まず、曹丕の「典論論文」に関して検討する。『文心雕龍』は「序志篇」において文学理論の嚆矢としてこれをあげ、また「魏文の篇章を音楽に比するは、蓋し徴あり」（総術篇）「典論は弁要」（才略篇）など、高い評価を与えている。これに対して、『詩品』は「典論論文」を閑却する態度をとっている。『詩品』が「気」に優れた作者として劉楨を高く評価する背景に曹丕の文学論の影響があることは確かである。曹丕は「典論論文」において「気」にもとづく文学理論を展開し、また「呉質に与ふる書」に劉楨の文学について、「気」に優れ、五言詩を得意とすることを指摘している。それにもかかわらず、「詩品序」は先行の文学論として陸機以降の諸作をあげるだけで、曹丕の文学論については全くとりあげない。

評価の対象を五言詩に限定して作家の文学の優劣を論じる『詩品』の方法は、その文学のどのような側面に照射するのか焦点を絞る必要があり、このことは同時に、その作家の文学的要素の相当部分を捨象することを意味する。『詩品』が捨象した部分に光を当てれば、『魏志』文帝紀には曹丕の文学愛好と「皇覧」編纂の記事が見え、また陳寿もその該博なる文学的素養を指摘する。

『文心雕龍』も「才略篇」において「魏文の才は、洋洋として清綺なり。旧談之を抑へて、（曹）植を去ること千里なりと謂ふ」と述べ、曹丕の伸びやかな才能を賛し、曹氏兄弟の才能を分析して旧弊を正そうとする。同篇にまた「然れども子建（曹植）は思ひは捷にして才は儁、詩は麗にして表は逸なり。子桓（曹丕）は慮ひは詳なれども力は緩、故に先鳴に競はず。而れども楽府は清越、典論は弁要なり。迭に短長を用ひて、亦た懵きことなし」と記し、「楽府」や「典論論文」に曹丕の優れた才能を認めている。さらに「神思篇」では作家の文学的資質の相違を述べ、「覃思の人（熟考遅筆型）」と「駿発の士（一気呵勢型）」とに分類している。これによれば、さしずめ曹丕は前者に、曹植は後者に相当すると言えようか。

ここで『詩品』（中品）曹丕評をあげ、その問題点について検討してみよう。

其の源は、李陵に出づ。頗る仲宣の体則有り。計る所の百許篇、率ね皆鄙直にして偶語のごとし。惟だ「西北に浮雲有り」の十余首は、殊に美贍にして翫すべく、始めて其の工を見はす。然らずんば、何を以て羣彦を銓衡し、厥の弟に対揚する者ならんや。

鍾嶸は曹丕の文学の特徴を「鄙直」「偶語」の二語によって概括するが、これらは通俗的で文学性に乏しいことを意味している。もし「西北に浮雲有り」を初めとする十余首の詩を作る才能がなかったら、建安の七子を評価しえなかっただろうし、弟の曹植と張り合うこともできなかっただろうと言うのは、「典論論文」の「蓋し君子は己を審にして以て人を度る。故に斯の累より免がる。而して文を論ずるを作す」を皮肉ったのである。これとは対照的に、『文心雕龍』（才略篇）「遂に文帝をして位の尊きを以て才を減ぜしめ、思王をして勢の窘しむを以て価を益さしむるは、未だ篤論を為さざるなり」には、所謂「判官贔屓」によって不当に低く評価されていた曹丕の才能を再評価しようとする姿勢が見える。

ところで、『文心雕龍』と『詩品』とについて、その制作状況をめぐる対照的な記事が残っている。『梁書』文学伝下には劉勰がその著を携えて沈約を訪ね、これに推重されて文名を得たと記し、一方鍾嶸は沈約に推輓を求めてすげなく断られたことを恨みに思い、その卒するのを待ってその著をなしたと『南史』文学伝はいう。この記事を裏付けるかのように『詩品』（中品）沈約評は悪意に満ちている。ここにその一部分をあげる。

文は其の工麗に至らずと雖も、亦た一時の選なり。閭里に重んぜられ、誦詠音を成す。嶸謂へらく、約の著はす所既に多し。今淫雑を剪除し、其の精要を収むれば、允に中品の第を為す。

これを前掲曹丕評の傍線部の記載と対照した時、両者が内容的に類似していることに気がつく。鍾嶸は曹丕の文学が概ね素朴で生硬な表現を特徴とし、その十分の一が辛うじて見るに値すると言っている。このことばは、沈約の文学に対して、「工麗」からは遠い卑俗な表現によって閭里に重んぜられたと評し、その多くの「淫雑」なる作品から「精要」だけを評価の対象とすればやっと中品にすえることができると記すのと全く符号する。これは、曹丕に対する低い評価と沈約のそれとの関連性を暗示するものと考えられないだろうか。

『詩品』はまず曹氏兄弟の懸隔を明確化した上で、曹植に次ぐ詩人として、建安七子の中から劉楨を選び、王粲を埒外に追いやった。曹（植）・劉（楨）を「国風」を源流とするグループに、王粲と曹丕を「楚辞」を源流とするグループに分類したのである。この〈王粲―曹丕〉と相似的関係にあるのが、王粲と沈約とを結ぶ関係である。沈約を起点に源流をたどっていくと、沈約評に「固より鮑明遠を憲章するを知るなり」と言い、そこで鮑照評をみれば「其の源は二張に出で」とあり、張協と張華を源としている。また両者の評語にはともに、「其の源は王粲に出づ」とあって、結局王粲に行き着く。これを整理すれば〈王粲―張協・張華―鮑照―沈約〉ということになる。要するに、『詩品』は沈約を貶しめようとする意図をもち、自己の設計図どおりにこれらの操作をおこなったと思われるのである。